



# 日本宣教ニュース

NO. 12 2018年6月

東京基督教大学  
国際宣教センター  
日本宣教リサーチ  
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ1:6）

## 【巻頭言】

### 信仰継承とは「三代目 JSoul」と見つけたら ～次々世代までを視野に～

日本福音キリスト教会連合（JECA）

春日井聖書教会協力牧師 水谷 潔

少し前の話になりますが、3月1日の主日は、所属教会で礼拝をささげました。早川恵三牧師による礼拝メッセージは、第Ⅱテモテの2章2節から。2月にKGK 東海地区協力会主催で行われた青年宣教シンポジウムでの発題に準ずる内容でもありました。

「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。」（Ⅱテモテ2:2）

説教の冒頭、この聖句には四つの世代が含まれているとのご指摘。これには、目からウロコ。命じているパウロは第一世代。そのパウロに命じられているテモテは第二世代。テモテがパウロから聞いたことを、委ねる相手は、他の人にも教える力のある忠実な第三世代。そして、その第三世代から、教えられる他の人が第四世代。

なるほど、まさにここには、四つの世代が含まれています。それを納得したところで、牧師が語った適用がまさに私たちのこと。教会の大人たちの多くは戦後の「第二世代」のテモテに相当するのだから、次世代が次々世代を教えられるように育てるべきとのご指摘。近視眼的になりがちだが、教会は次世代でなく、次々世代までを視野に入れて歩むべきとのお勧めでした。

これには、悔い改めました。本ブログでは、信仰継承、次世代の救いと育成などを論じてきましたが、それは、パウロの視点からすれば、近視眼的であったのです。パウロは、自分から見て四世代先まで、視野に入れて命じていたのですから。自分は戦後第二世代でしょうから、テモテが命じられたように、次々世代までを視野に入れて、考えるべきだったのです。まさに、聖書的な信仰継承とは、次世代への信仰継承ではなく、次世代が次々世代を教え導けるように育てることだと教えられました。

聖書的な信仰継承とは、自分から見て三代目までに、“Jesus”の“Soul”を継承することなのです。ですから、信仰継承とは、今風に表現するなら、「三代目 JSoul」と言えるでしょう。

お孫さんを持つクリスチャン女性からは、何度も、こういう言葉をお聞きしてきました。「自分の子どもの子育てを見て、初めて自分の子育てが評価できました」と。

これは、聖書的な信仰継承にも通ずる経験だと思のです。「自分が導き育てた次世代クリスチャンが、次々世代を導き育てるのを見て、初めて、自分の信仰継承が評価できました。」

きっと、聖書的な信仰継承を成し遂げた方は、長い年月を経て、こうした言葉が言えるのでは？と思ったりします。

今、教会に次世代クリスチャンが一人しかいないとしても、その一人が、「他の人にも教える力のある忠実な人」に成長し、上の世代から継承してきたものをゆだねることができれば、次々世代クリスチャンは10人になるかもしれません。逆に、今、教会に次世代クリスチャンが10人いたとしても、その10人が「他の人にも教える力のある忠実な人」に成長せず、上の世代から継承

してきたものをゆだねることができなければ、次々世代クリスチャンは1人になってしまうかもしれません。

そうです。「次世代の1対10」は「次々世代の10対1」に逆転しうるのです。ですから今、次世代が一人だからと言って、悲観しているわけではありません。その一人を、いいえ、貴重な一人だからこそ、愛し、祈り、支え、教えて、「他の人にも教える力のある忠実な人」に育てましょう。一方、次世代が10人もいるからと言って、感謝こそすれ、安易に喜んでいる場合ではないでしょう。「他の人にも教える力のある忠実な人」に育てなければ、次々世代においては、「昔はよかった」と今を喜べない状況に陥るかもしれません。

信仰継承の評価対象は何でしょうか？パウロの考えによれば、それは、次世代ではなく、次々世代なのです。次々世代をもって、第一世代の働きは評価されるのです。

ですから、教会の次世代が増えること以上に、今いる次世代を、次々世代を教える力のある忠実な人に育てましょう。ベテランクリスチャンは、「若い人がいない」と嘆くより、次々世代を視野に入れて、今いる若い人を育てましょう。年齢によっては、自分の目の黒いうちに、教会に集う多くの若い人を見ようと思わず、地上での自分の祈りと愛と労が、報われているのを天から見るつもりで励みましょう。その報いはどんなにか大きなものでしょう。

大切なのは「今、次世代が何人いるか？」ではなく、「今、自分世代がすべきことをしているか？」です。教会の将来を決めるのは「今の次世代人数」よりも「今の教会の信仰継承意欲と教育力」です。聖書が私たちに示しているのは、「次世代への信仰継承」に留まらない「次々世代までの信仰継承」なのです。私たちが見たいと願うべきは「成熟した次世代」だけではなく「成熟に向かっていく次々世代」ではないでしょうか？

また、お互いが「三代目 JSoul」を目撃するのは、「地上」とは限らず「天」であることも想定すべきでしょう。

#### 信仰継承とは「三代目 JSoul」と見つけたら！

少子高齢化だからこそ、「今」でなく、さらに「次世代だけ」でなく、「次々世代までも」視野に入れながら、「今、できること」「自分世代がすべきこと」を始めましょう。

\*【水谷潔のブログ】「命と性の日記～日々是命、日々是性」  
(2015.03.12 Thursday) より転載

## 【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、「次世代育成」特集号として、JEA 宣教委員会宣教研究部門の活動と、去る5月21日に行われた「JEA 宣教研究部門担当者会議」のレポートを掲載させていただきます。

### 1. JEA 宣教委員会宣教研究部門の活動目標

JEA 宣教委員会は、従来の体制では伝道会議をつなぐ宣教フォーラムの運営だけで手一杯である実状に鑑み、今後、宣教協力のインフラ（教団・教派を超えた協力体制を恒常的に機能させる仕組み）を整備するためには、さらに、日本の宣教に関する提言・研究を行う機能が求められていること、また国内だけではなく、海外での日本語宣教（ディアスポラ等）も日本宣教の課題として考えていかなければならないことから、宣教委員会を①宣教フォーラム部門、②宣教研究部門、③異文化宣教ネットワーク部門の三部門を持った委員会とすべき、との第6回伝道会議(JCE6)「宣教とそのインフラ造り」プロジェクトの提言を受けて、JCE6後に三部門体制に移行しました。

そこで、宣教研究部門では諸団体が抱えている実際的な宣教現場の課題や宣教トピックスについて、データ収集・分析を行い、JEA 理事会、JEA 加盟団体に有用な情報提供および提案を行い、日本の福音宣教の推進強化に寄与すべく、日本宣教の喫緊の課題として次の三点を選び、JCE7（2023年開催予定）までの期間を3つに分けて、何らかの提言を取りまとめていきたいと願っています。

- (1) 次世代を育てる宣教インフラの整備
- (2) 地域宣教ネットワーク構築により強化される地方伝道、都市伝道
- (3) 教会の再生、増殖への道筋の明確化

年 度	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
							▼
(1) 次世代を育てる宣教インフラの整備	—————▶						JCE7
(2) 地域宣教ネットワーク構築による地域宣教の強化			—————▶				
(3) 教会の再生・増殖への道筋の明確化				—————▶			

## 2. 次世代を育てる宣教インフラの整備

### (1) 「次世代育成」検討に関わる関連要因

「次世代育成」と言った場合、ややもすれば「若者を育てる」課題であるとイメージを特定して受け止められる向きもあります。しかし、実際には若者といっても、児童と青年とでは対象意識の違いがあること、また、児童・青年の課題に直接影響を及ぼす環境の課題も異なります。

環境の課題としては、大きく内的と、外的環境があり、内的には、独身者、いわゆる非婚化や、夫婦関係、子育て（信仰継承）といった課題、さらには、次世代や家族に関わる教会や教団・教派の体制、そして種々の専門団体の関わりなど、キリスト教界内部の環境もあります。

また、外的環境としては、現代の若者意識を理解することは当然のことながら、彼らに影響を与える社会意識、文化、制度など幅広い一般社会の課題があります。

従って、「次世代育成」について検討を進めるためには、これらの次世代に関係する課題を扱うJEAの他プロジェクトとも連携しながら、より幅広く検討を加えていく必要があります。

たとえば、

- ① 「女性委員会」との協力で、クリスチャンの結婚（非婚化を含む）、子育て、信仰継承といった家族の現状や課題を理解する
- ② 「子ども・青年プロジェクト」との協力で、超教派のユースミニストリーや、CSK、hi-b.a、KGK、CCC、ナビゲーター、CEF、CS 成長センターなどの諸宣教団体の活動の現状や課題を理解する
- ③ 「日本社会と宣教プロジェクト」との協力で、キリスト教系学校の課題のみならず、地域社会における意識、文化、制度、そして一般学校といった外部環境の現状や課題を理解するなど諸分野との連携による作業が必要となります。

### (2) 検討事項とスケジューリング

具体的な検討事項としては、次のようなものがあげられます。

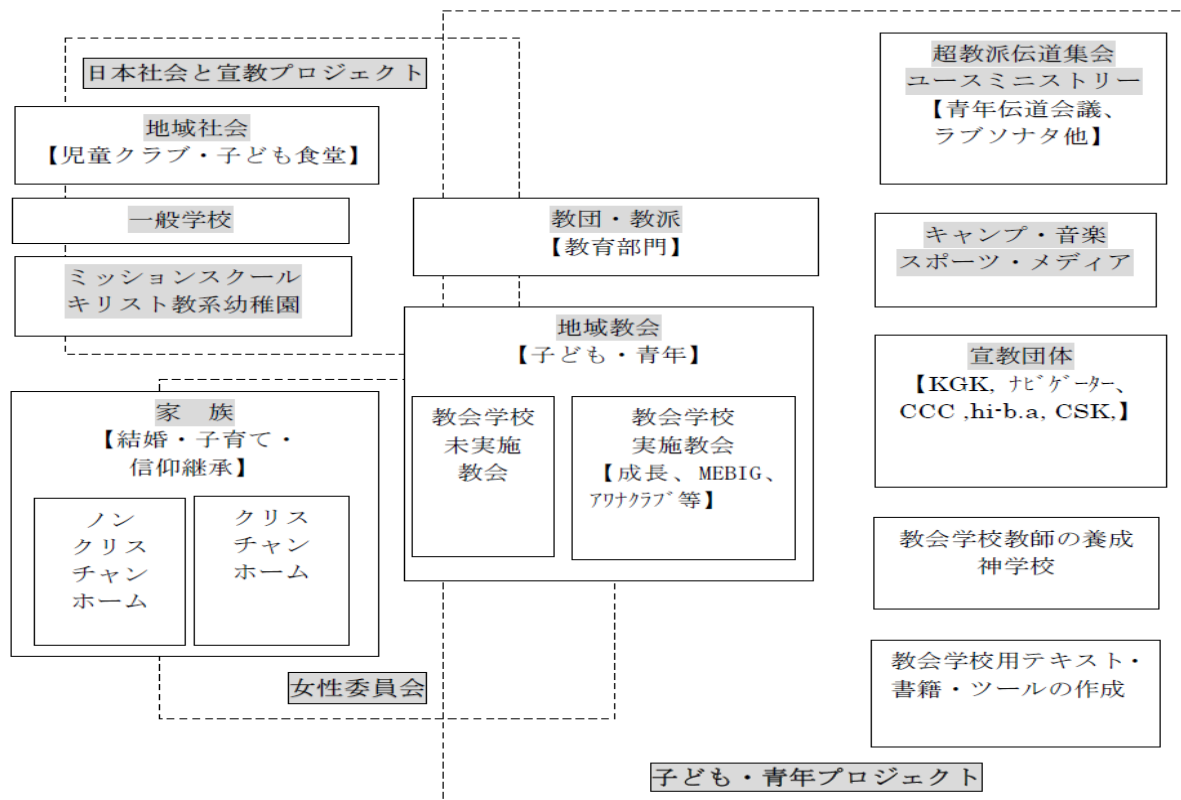
- ① 教団・教派の取組み状況の調査
- ② 各地域教会の取組み状況の調査（成功している教会の事例紹介含む）
- ③ 各宣教団体の取組み状況の調査
- ④ キリスト教系学校の取組み状況の調査
- ⑤ JEA 内関係プロジェクト、委員会の取組み状況の調査
- ⑥ 有識者の提言：「次世代育成」に重荷と使命感を持って積極的に取り組んでいる方（実践神学的に）の提言
- ⑦ 文献調査：「次世代育成」に関する文献の提言・要旨をまとめる
- ⑧ 提言の検討、とりまとめ（『質的なデータブック』の作成）

### (3) 宣教研究部門担当者会議の開催

JEA 宣教員会宣教研究部門では、広く各教団・教派の宣教研究部門の担当者や宣教団体の実務者を交えて、各団体が抱えている実際的な宣教現場の課題を忌憚なく分かち合い、課題を共有し、打開策を共に考える場として、毎年宣教研究部門担当者会議を開催することとしています。

今年は、その第二回として「次世代を育てる宣教インフラの整備」に特化し、次のような話し合いの場を持ちました。

# 1. 関連要因図



作業項目	2017年	2018年	2019年
1. 「次世代」を取り巻く環境、意識調査		→	
2. アンケート調査			
(1) 教団・教派の取組み状況の調査		→	
(2) 各地域教会の取組み状況の調査		→	
(3) 各宣教団体の取組み状況の調査		→	
(4) キリスト教系学校の取組み状況の調査		→	
(5) JEA内関係プロジェクト、委員会の取組み状況の調査		→	
		女性委員会	
		子どもプロジェクト	
		青年プロジェクト	
3. 具体的な事例調査（成功している教会、家の教会、4/14運動、MEBIG、アワナ等の事例紹介含む）		→	
4. 有識者の提言、文献調査		→	
6. 「次世代育成」に関する振興策の提言の検討、とりまとめ			→

## ◎ 第二回宣教研究部門担当者会議の概要

【日時】2018年5月21日(月) 13:00-16:00

【会場】お茶の水クリスチャンセンター (OCC) 411号室

【内容】「次世代を育てる宣教インフラの整備」に特化し、次世代育成に関する各教団・教派の課題を共有し、共に考え、何らかの打開策を見出す。

【出席者】参加教団・教派 20 団体、宣教団体 7 団体、参加者数総数 40 名

【会議概要】・参加者を 6 グループに分け、「次世代を育てる宣教インフラの整備」について、①課題、②取り組み、③アイデアの三つの点から情報・意見交換を行いました。

## (1)「次世代育成」の課題と取り組み

「次世代育成」についてどのような課題と取り組みがあるのか、宣教研究部門担当者会議の各グループより提出された課題を見ても、既にこれまでも語られてきたことが多く、決して新しいものではないと言えますが、教会レベルと教団・教派レベルに分けてまとめてみました。

### 【教会レベル】

#### ①児童・青年をとらえる

教会レベルで次世代育成と言った場合、既に児童・青年を対象にそれなりに体制を組み、集中してこの問題に取り組んでいる教会もあります。そのような教会では、種々の教育訓練プログラムの実践、若者をターゲットにしたイベント、集会の実施、児童・青年たちが安心して交わることのできる環境の構築などがその課題としてあげられます。

しかし、その一方で、児童・青年そのものがない教会の方が、より多いという現実があります。それに対して、たとえそうであったとしても、児童・青年が集まることを想定して準備をしていく考え方を持つことが重要である、との指摘もありますが、実際に、児童・青年だけではなく、教会員自体が高齢化し、準備に取り組むスタッフすらいない現状もあります。

このような状態で一体何ができるのか、そもそも教会学校が児童や青年をとらえられなくなった問題をどう解決していくのか。イベントに参加させるところまではできても、教会につながられない、中学生になると教会学校からも卒業してしまい、青年リーダーを育てられないという問題があつたりします。

従って、大多数の教会では、もはや一教会の努力だけでは限界を超える状況を呈しており、地域の教会同士の協力関係や教団・教派の関わりや支援、宣教団体やキリスト教学校との連携等による取り組みが、逼迫した課題としてあげられると言えます。

#### ②信仰継承（子育て）、夫婦関係

近年、クリスチャン二世、三世が増えている状況において、信仰がしっかり継承されていないことが指摘されます。何が問題なのか、特定される問題は少ないとは思われますが、理想的なクリスチャンホームのイメージが強く、家庭における信仰の律法主義化といった問題、子どもに影響を与える夫婦関係のあり方の問題などが考えられるところです。実際札幌宣言によると、日本の家庭の大きな課題は夫婦関係の揺らぎにあるとされ、それはクリスチャンホームもまた例外ではありません。教会は、個人の問題から、家族の問題への対応を考え、取り組まなければならない時代に置かれていることは間違いないと言えます。

#### ③独身者、いわゆる非婚化

配偶者の決め方は、1960年代後半から、見合い結婚と恋愛結婚の割合がひっくり返ったとされます。そして、婚姻率はゆっくりと下降線をたどり、1995年をピークに婚姻数は下がってきています。実際平均初婚年数は、1970年には男性27歳、女性24.5歳でしたが、2015年には男性31.1歳、女性29.4歳になりました。こうして、教会にも結婚をしない男女が増加してきている問題があります。次世代の自然増の可能性が弱められてきています。その背景には、若者の「理想の追求」が以前にも増して強くなってきている問題があると言われていますが、根本的に出会いのきっかけの場がない問題もあり、これも一教会の取り組みだけでは解決し難い問題と言えます。

#### ④高齢化

最後に、次世代の育成を強調することが必ずしも、教会によっては根本的な解決にならず、むしろ教会の構造を破壊していく問題も考慮していく必要があります。つまり、教会の成長は総合的な取り組みであり、次世代のみならず高齢化の問題に対しても、バランスよく取り組まなくてはならないものです。2025年には、高齢者人口が3500万、現在の3倍以上に達し、ことに地方よりも都市部の高齢者が倍近く増加すると予測されている状況にあって、教会は、新しい世代と古い世代が共存し調和できるあり方を模索しなくてはならない状況にあります。

こうした将来に備えて、教会は何を学んでいけばよいのか、どのような能力を身に付けていったらよいのか、あるいは、どんな文化・風土を作り出していったらよいのか、問われることとなります。

そして、教会の「次世代育成」を促進するために、教団レベルで、あるいは宣教団体、キリスト教学校などどのような連携を組むことがよいのか、現状では、教団・教派レベルのネットワークですら、多くの場合必ずしも次世代育成を推進する十分なプラットフォームとなりえ

ていない課題もあり、どのような教団・教派間協力が求められているのか、専門団体との連携が望まれるのかが、検討される必要があります。さらに、専門性を持った宣教団体が持っているノウハウ、考え方、テキスト類などが分かち合われていく必要もあることでしょう。実際には、そうした知的アーカイブが、WEB上のパスワード保護のもとで、共有されるプラットフォームシステムが、結果として構築されることが、期待されていることなのかもしれません。

#### 【教団・教派レベル】

教団・教派によっては、児童やユース向けのキャンプ等を経て献身者を獲得し、神学校へとつなげて教育訓練を施し、教会に送り返すという次世代育成の循環に成功している団体の報告があります。では、同じような手法を各教団・教派が取り入れていくにしても、そうしたサイクルを作り軌道に乗せていくためには、どのくらいのタイムスパン、あるいはプロセスや活動、施設が必要なのか、また各教団の諸事情、たとえば教団・教派の政治形態のあり方がそうした改革や発展性に障壁として作用する課題もありますので、それぞれの政治・運営形態の特色に合わせ、どのような変革計画が可能なのか、実行可能性のある実践例が検討される必要があるでしょう。

また、次世代の育成と言った場合、教団・教派の理事会からすれば、「次世代リーダー」とは、「将来、事業や組織を牽引できる人材」とも言えます。教団・教派の成長・発展を担う存在としての「次世代リーダー」を確保できるかどうかは、教団・教派の盛衰を左右するものです。果たして各教団・教派は、こうした「次世代のリーダー」を十分に確保できているのか、そこから問われなければならないのかもしれませんが、当然予測されることは、各教団・教派の特徴によって次世代リーダーの内容も性質も変わってくる、ということです。

たとえば、グローバルな展開度、つまり宣教の海外展開をどれだけ行っているかという観点からしても、グローバルな展開度が高ければ高いほど、次世代リーダーの確保は難しい課題になっているはずです。

また、世代循環が一代目から四代目、五代目まで進んでいるような団体と、まだ二代目に入ったばかりという若い団体との間でも、課題や取り組みの差があることでしょう。グローバルな展開度が大きく、団体歴の長い教団・教派ほど、「団体の経営者」としての役割を担う者の育成が課題になると考えられますし、その逆に団体歴の若い教団・教派では「職能部門のトップ」としての役割を担う者の育成が課題になるのではないかと考えられます。

そこで、多くの教団・教派は、次世代を育成するために人材を「選抜」して取り組んでいるはずです。問題は、その選抜の主体者はどこなのか、また、選抜基準や選別すべき人材像も不明確なままに行っている可能性がある、ということです。

また、教育内容にしても、霊的なリーダーシップや経営管理知識、事業戦略の策定・提言、組織課題の解決等と種々あるものの、きちんとプログラム化されているか、或いは予算はどれほどなのか、といったことも今後の調査で、現状を明らかにしていきたいと思えます。

しかし、一番重要なのは、教育に対する現在の教団・教派のリーダーの意識です。次世代リーダーの育成は一朝一夕にはいかず、1~2年の短期間のOff-JTでは効果をあげることはできません。複数年の期間をかけて、複数階層にわたる、段階的に腰を据えた取り組みが必要であり、そうしたことへのリーダーの強い問題意識と中長期的視点に基づいたバックアップがどれほどあるのかが問題です。

こうした部分の教団・教派における整備の遅れが結果として、身近で生活を共にする二世、三世牧師が、その長期に自然なOn-JTによって、教団・教派の複雑高度なリーダーシップを担われるシステムが定着化し、将来的に組織のイノベーションを起こしにくくしていくであろうことも考えられます。「何のために」「どのようなリーダーを」「いつまで」「どの程度」育成する必要があるのかを明確にした、教団・教派レベルでの次世代育成の研究が整理される必要があります。

#### (2) アイデア

最後に、次世代育成のためのアイデアについて、研究部門担当者会議においては、自由な意見交換の時を設けましたが、この件については、出されたアイデアの妥当性および効果について検証する必要があります。それを踏まえた上で、これらのアイデアを一瞥すると、逆にそこに現状の何が問題なのかが、示唆されている点が興味深いところです。

たとえば、「失敗してよいので、若者にやらせてみる」あるいは「権限を委譲する」など、次世



代育成において身近な現場での意識は、関わり方に向けられていることがわかります。主体性を育てる関わり方をしていない、いわゆる教え込むあり方が教会の風土、文化としてあることを伺わせるものがあります。

また、「ないものではなくあるものに目を向ける」いわゆるないものねだりで、今ある現状にしっかりと向かい合っておらず、どこか空想的な教会の繁栄を夢見ながら、空振りのイベントが重ねられている状況があるのかもしれませんが。さらに、キリスト教学校もそうですが、専門性をもった宣教団体や最も自然に福音に触れる機会を持つキリスト教学校という機関を教会や教派教団が生かし切れていない、上手な連携が取れていない課題があるということです。

そういう意味で、感覚や推測で論じるのではなく、現状をしっかりと把握し、そこから有効な対策を提言していく必要性を強く感じています。

### < 宣教研究部門担当者会議ディスカッション内容 >

#### (1) 次世代育成に関する課題

##### 【教会レベル】

##### < 児 童 >

- ・教会学校から子供がいなくなった。特に小学校上級生は、習い事や塾、中学生は部活で忙しくなる。全国で教会学校を行っていない教会が多い。
- ・教会の近隣に子供はたくさんいるが、彼らにアクセスできない（マンションや学校でチラシなどを配れない）。
- ・小学校を卒業すると教会学校も卒業していくケースが多い。
- ・キャンプやイベントには参加するが、教会には行きたくないとして、教会につながらない。
- ・教会学校に来る子は、家庭の縛りがいない子、家庭に問題がある子供達が多い。
- ・子ども同士は SNS で連絡を取り合い、互いにつながっている。話題は芸能関係のことが多く、世代間ギャップがある。

##### < 青年層 >

- ・青年層を捕らえられない。青年がいないわけではないが、青年たちのうちに、リーダーシップや伝道への姿勢が弱い。信仰の継承がなされにくい。
- ・外国人教会の若者は多い→信仰継承がしっかりできている。
- ・次の世代のリーダー（弟子を作れる弟子）を育てることができない。

##### < 高齢化・結婚・家族 >

- ・高齢化で、年配者の理解が得られにくい。必要なのは、自分たちの助けであるという。
- ・結婚しない独身者が増えてきている、草食系から絶食系へ男性が変化してきている。

##### < アプローチ・体制 >

- ・若い世代、社会の変化を教会がわかっていない。若者文化は急激に変わっている。まずコミュニケーションツールが変わり、古い世代の人たちは、コミュニケーションを取ること自体が難しい。また、若者は関係が大事。押し付けられることを嫌う。教会に求められることも、本音で話せるなどの関係性である。
- ・次世代に特化し過ぎてしまうのも、あまり良くないのではないか。
- ・教会の人も忙しすぎる。若い世代に関わることができる、若い働き人を育てることが必要。
- ・現在教会にいる世代（特に熟年層）が次世代育成の大切さに気付いていない。
- ・教会内の閉鎖的な文化、習慣やしきたりがある。
- ・世代間のギャップがある。世代をつないでいくための、信頼できる環境、人材、そういう人や場所を、教会がどのように生み出していけるかという課題がある。
- ・牧師が彼らのことを世話するのは難しい。牧師に話せないようなことを話せる相手が必要。
- ・現状を維持しつつ（あるいはやめて）、新しい取り組みに時間をどうやって使っていけるかが課題。

##### < 社会意識・文化 >

- ・2030年問題（日本基督教団の信徒が半減予測、福音派50歳以上が9割）がある。
- ・今の若者は、大人が想像できないような関係づくりをするため、それを知ることが大切だろう。若者に届く言葉で説教をすること。礼拝そのものを根本的に考えていく必要があるだろう。先輩の先生から受けた教えを変えたくない、という悩みがあり、課題になる。聖書的であることを大事にしなが、次世代に届いていくパラダイムシフトが必要だろう。

## 【教団レベル】

### <若者>

- ・特に中高生の数が落ちてきているので、次世代の宣教と献身者が起こる事を目指している。
- ・小さな教団だと結婚したいができないという例が多い

### <アプローチ・体制>

- ・牧師の高齢化が進んでいる。次世代を担う顔が見えない。後継者が育たない。
- ・教会が全国にばらけていると、教団同士の交わりが難しい。
- ・パラチャーチとの良い協力があれば良い

## 【宣教団体レベル】

- ・次世代育成という意識があまりない宣教団体もある。人気のあるゲストの時は、人もたくさん集まる。
- ・伝道団体の取り組みは、そのまま教会に取り入れることが難しかったりする

## (2) 取り組み

### 【教会レベル】

- ・教会で子どもの学びの時間を確保している。小学校高学年からはハイデルベルクで教理教育をし、神の子であるというアイデンティティを育成している。
- ・部活の選択を個人に任せ、それぞれこの世と戦いましょうという姿勢を大事にしている。
- ・礼拝のあとにCSがあり、子どもから大人まで、それぞれのクラスで学ぶ。CSの位置づけは伝道ではなく教育。成人科は神学科と教理科があり、教会の一人一人が自立した信仰者となることを促している。
- ・青年たちが安心して交われる環境作りが必要。地域の三つの教会が声をかけ、年四回の合同青年会を開催。(現在12教会の参加)年間スケジュールとテーマを決め、青年たちも企画への参画を促している。幹事教会が会場、食事等を提供している。クリスチャンどうしの結婚の機会にもなることを願っている。
- ・その時、その時ののりと必要とでイベントを行っている。教会だけでなく、会館など大きい場所を借りてイベント(ダンスなど)をやると、みんなやる気を持って参加し、活性化していくし人も集まる。ショッピングモールでイベントをやり、子供達の踊りの発表会をした。親も喜んで参加するし、お店もお客さんが集まるので喜んでくれる。
- ・初めから、若者をターゲットにし、音楽もワーシップ中心にして、若者がどんどん集まった。そして、若い人が誘いやすい教会になっている。
- ・兄弟、姉妹という言い方はやめた。若者は先生とも呼ばない。呼び方ではなく「本当の関係」を大切にしてきた。
- ・地域の必要をもっと考えなければいけない。
- ・公園伝道として、集まった子どもや親にメッセージをしている。
- ・宿題会を教会で行い、家庭環境の悪い子どもの居場所作りをしている。

## 【教団レベル】

- ・かつては「聖会」が次世代育成では主流であった。10年時間をかけて、次世代の働き人が養成されてきている。お見合いや結婚希望者を想定して、結婚した夫婦と子どものための交わりの場を提供している。
- ・教団で保持しているキャンプ場を青年たちの出会いの場として活用している。
- ・ユースキャンプから神学校(献身者育成)への流れがうまく機能している
- ・各個教会主義の団体では、全体を動かすのは非常に難しい。
- ・思い切った人事(リーダーシップ)の刷新が必要。
- ・教団では小学校6年間に教区ごとのキャンプや全国キャンプへの参加を奨励し、費用への援助をしてきた。また各地区を回って青年キャンプを開催してきた。
- ・教団として、弟子作りのできる人を養成するトレーニング・プログラムを実施している。

## 【宣教団体レベル】

- ・奉仕をしている人たちの背中を見て、自分たちもあなりたいという思いを持ち、やがて奉仕をするようになっていく。奉仕の種類も豊富。  
(松原湖バイブルキャンプ)





- ・ビジョントリップなど、海外宣教の現場に送り出すと献身に導かれるケースがある。貧困の地域に興味がある。

### (3) アイデア

#### 【教会レベル】

- ・新しく来た人に、教会はもっと関心を払って、話しかけたら良い。
- ・失敗して良いので若者にやらせ、自主性を育てることを大切にする
- ・若いリーダーへの権限移譲。自由にやらせるだけではなく、枠を作って、その枠の中で自由にやらせる。
- ・情報を共有するような場所を作っていけると、みんなで一緒に祈っていけて良い。
- ・仲間がいない学年の子どもは、フォローはするが、定着が難しい。
- ・ないものではなくあるものに目を向ける。毎月一回土曜日に、母親と子どもたちの泊まり会を継続した（牧師の子どもも一緒）。遊びや食事を一緒にし、互いに楽しみ励まし合う間柄となった。音楽チームを作り CD の制作もした。高校生になると小中学生のクラスの補助となり、後輩を育てた。宣教旅行に行く際の基金を提供した。教会から離れることがあっても「仲間」のつながりは切れなかった。教会の子どもたちが育つことにエネルギーを注ぐ。地域の子どもへはイベントで対応した。
- ・牧師は裏方にまわるようにする。
- ・対象となる若者が来てから行うのではなく、集うことを想定して準備していく

#### 【教団レベル】

- ・伝道団体とどのように関わったら良いか分からない、というところがある、良い信頼関係が持てているモデルがあると良い。

#### 【宣教団体レベル】

- ・次世代リーダーを養成するツール（アニメ）やアプリの開発を行いたい。

【文責】 JEA 宣教委員会 宣教研究部門



## あとがき

梅雨入りのしとしとと降る雨に、紫陽花の青や紫、白や淡いピンクの花が映える今日この頃、折しも6月18日午前、大阪北部で震度6弱を観測する地震により、大きな被害が発生していますが、皆様にはお変わりないでしょうか。被害に遭われた方には、お見舞い申し上げます。

さて、ここに「日本宣教ニュース」第12号を皆様にお届けすることができることを感謝致します。今回は、「次世代育成」特集号として、去る6月4～6日に行われたJEA第33回総会での宣教委員会宣教研究部門の発表原稿をもとに、多少アレンジしたものをJEA宣教委員会宣教研究部門のご了解をいただいて掲載させていただきました。

「巻頭言」も「次世代育成」にふさわしい内容のものとして、日本福音キリスト教会連合 春日井聖書教会の水谷潔協力牧師のブログから、ご了解をいただいて転載させていただきました。

「次世代育成」は、言うまでもなく日本宣教の喫緊の課題ではありますが、関連する要因が多種・多様で一筋縄ではいかないこと、そしてその成果は長いスパンで見るとを要する問題であること等から、大きな壁を感じてどうしたらよいかと頭を悩ませている教会が多いのではないのでしょうか。日本基督教団の約35%の教会が、また福音派の教団でも約20%前後の教会が、CSを行っていないか、或いは行っても出席者がいないというデータからも、その現状を伺い知ることができるのではないかと思います。

しかしそれは、水谷師が言われるように、「今の教会の信仰継承意欲と教育力」が問われる問題とも言えます。厳しい言い方をすれば、伝道一本やりで洗礼を受けたら終わり、信徒の弟子化を促す教会教育に力を注がない教会、個人主義的な信仰形成が主で、神の家族としての信仰共同体を形成する実践的な努力を怠ってきた教会、そして、何よりも現代の若者に、見せかけだけの権威や、言葉だけではない本物のキリストの愛を体現する「魅力ある教会」を形成してこなかったつけが

回って来ている、といっても過言ではないように感じます。そしてそれは、取りも直さず「教会の再生」につながる問題でもあるのではないのでしょうか。

そのような日本の教会の失地回復を図るには、並み大抵の問題ではありません。すでに「次世代育成」に重荷と使命感を持って積極的に取り組んでおられる方はもちろん、神学や教会教育等の有識者や指導者の方含め、多くの英知を結集していく必要があると思います。

現在、今回号でご紹介したような取り組みを、宣教委員会宣教研究部門を中心に行っていますが、陣容としては、はなはだ手薄なのが現状です。是非心ある方々のご意見やご提言、或いはご協力等を、JEA 宣教委員会宛にお寄せいただけると幸いです。 (初穂)

## 献金者名 (2018年3月～2018年6月)

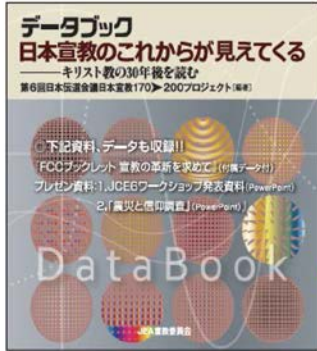
◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。(敬称略)

金 安信、柴田美枝子、鈴木陽一、中野 覚、日本キリスト教連合会、  
日本同盟基督教団、廣田具之、本郷台キリスト教会、三谷康人、柳下 弘



## 刊行物紹介と講習会のご案内

### データブック 『日本宣教のこれからが見えてくる』 CD-ROM 版 (好評発売中)



グラフや図がカラー  
表も見やすい  
有用なデータが満載  
プレゼン資料も収録  
定価 1,000 円+税

#### 【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」-キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCC ブックレット 宣教の革新を求めて』(付属データ付)
- プレゼン資料: 1. JCE6 ワークショップ発表資料 (PowerPoint)  
2. 「震災と信仰調査」(PowerPoint)』

【編著】第6回日本伝道会議「日本宣教170 ▶ 200 プロジェクト」  
東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ  
【発行】日本福音同盟 (JEA) 宣教委員会

【お申込み】住所・氏名・必要冊数・Email アドレスを、以下の連絡先にお送りください。  
なお、書籍代+送料実費がかかります。

E-mail: fcc@tcj.ac.jp 又は FAX:0476-31-5521

### キリスト教葬儀研究会

#### 日本宣教におけるキリスト教葬儀 開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言	倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状	柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景	大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ	稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会 -キリスト教葬制文化を形成していくために-	篠原基章
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて	倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ	清野勝男子
付記「キリスト教葬儀に関するアンケート調査」報告書	日本宣教リサーチ
まとめ	大和昌平
コラム 1~5 終活セミナー開催の理由他	野田和裕

NO.10

February 2018



東京基督教大学 国際宣教センター

定価 1,000 円+税

### 第一回 実践神学講習会

## 「日本宣教におけるキリスト教葬儀」

—未信者に開かれたキリスト教葬制文化を目指して—

日 時：2018年 7/19(木) 午前9時30分受付開始 ~ 7/21(土) 午後12時まで

場 所：東京基督教大学・国際宣教センター

内 容：①日本人の死生観・日本の葬儀の宗教的背景と現状

②キリスト教葬儀の実践神学的な裏付け

③未信者のための葬儀の実践（模擬葬儀）と終活セミナー

(講師：倉沢正則、大和昌平、稲垣久和、篠原基章、清野勝男子、柴田初男、野田和裕)

対象者：教職者及びキリスト教葬儀に関心のある方 (先着 30名)

参加費：11,000 円 (教材費含む)

\*お早めにお申し込みください。

食 費：昼食 (700 円)・夕食 (800 円)

\*近くにコンビニもあります

申し込み：7月5日(木) 必着にて、FAX または Eメールにてお申し込みください。

【お申込み・お問合せ】

E-mail: fcc@tcj.ac.jp FAX:0476-31-5521

## 感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR) は、この4月で発足から5年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき、活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2018年度は、JCE6「日本宣教 170▶200 プロジェクト」の流れを引き継ぎ、新たに JEA (日本福音同盟) 宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「教会の再生」「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」に取り組んでいきます。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく  
お願いいたします。

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
  - ・一口 30,000 円 (何口でも)
  - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
  - ・毎年 2~4 回「日本宣教ニュース」のご提供
  - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (詳細篇) のご提供
- (2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
  - ・一口 2,000 円 (何口でも)
  - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
  - ・毎年 2~4 回「日本宣教ニュース」のご提供
  - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (概要編) のご提供

### 日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金 (献金) は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金 (献金) 額の約 50% となります。

詳しくは、☎0476-46-1131 (TCI 募金係) までお尋ねください

郵便振替口座: 00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

- \* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。  
(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

**【Japan Missions Research】**

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内

TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp

<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学学長)

日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男